

ロシア東欧 経済速報

(社)ロシア東欧貿易会

2002年(平成14年)12月25日号 No.1248

目次

2002年1～9月のCIS諸国の経済	1
統計速報	4
CIS・中東欧諸国の市場経済移行進展度 / 4	
ロシア東欧経済速報 2002年(平成14年)掲載記事一覧	5
エトセトラ	6
調査月報最新号のお知らせ / 6	
モスクワ・メルマガNo.11(科学技術特集2)発行のお知らせ / 6	
CIS・中東欧諸国通貨の為替レート	6

2002年1～9月のCIS諸国の経済

はじめに

CIS諸国の2002年1～9月期の経済データがほぼ出揃ったので、本号ではCIS統計委員会発表の最新の統計データをまとめてお伝えする。

CIS統計委員会の発表によると、2002年1～9月期のCIS諸国全体のGDPは、前年同期比実質4%成長した(推計値)。CISの経済成長率は2000年の8.3%をピークに、その後は2年連続して減速しているということになる(第2表参照)。もっとも、これは経済規模の大きい(CIS全体のGDPの約7割を占める)ロシアの成長鈍化に起因するものであり、ロシア以外では高成長率を記録している国も少なくない。

ロシアでは、昨年後半以降の原油価格の低下を受け、設備投資の伸びが鈍化している。今年春に油価が持ち直したこともあり、経済の安定は保たれており、現在は旺盛な個人消費が経済を引っ張っている。ウクライナもひとまずは消費主導の成長軌道に乗ったようだ。

中央アジアとコーカサスの国々は、総じて高い成長率を示している(唯一キルギスはクムトール金鉱の事故と在庫調整が重なりマイナス成長)。カザフスタン、アゼルバイジャンでは、原油価格の低下にもかかわらず、活発な投資活動で高成長が維持されている。

こうしたなか、もともと特異な政治・経済体制で知られていたトルクメニスタンとベラルーシが、ここに来てにわかに国情を悪化させている。ニヤゾフ・トルクメニスタン大統領は1～10月の成長率を「世界で最も良好な経済指標」と誇ってみせたが、この2国の場合は見かけ上の経済指標などにかかわりなく、体制の危機が進行していると見るべきだろう。